

体感！エチオピア

実践場所	徳島県	郡里小学校	実践者	河野通之
対象	小学校5年生	時間数	6時間	
担当教科	小学校全科	実践教科	総合的な学習の時間・学級活動	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズやコーヒーセレモニーを通してエチオピアに興味をもつ ・貿易ゲームを通して貧困や経済格差が生まれる状況を体感的に学ぶ ・海外協力隊員の生き方を学び、夢を持って生きようとする心を育む 			
実践内容	回	プログラム		備考
	1	【エチオピアってどんな国】 Yes/No クイズを通してエチオピアの自然や文化について考える。〈個人・グループ〉 現地で購入したエチオピアコーヒーを親子で味わい、エチオピアの雰囲気を感じ取る。		参観授業
	2	【コーヒーセレモニーに挑戦】 自分たちで焙煎したエチオピアコーヒーを使って自宅でコーヒーセレモニーを催し、家族に日頃感謝の気持ちを伝える。		
	3	【もっと知ろう！エチオピア】 エチオピアの就学率や識字率、子どもたちが学校へ行けない理由について考える。		
	4・5	【経済格差が生まれる原因を考えよう】 貿易ゲームを通して、経済格差の実態を感じ取る。		
	6・7	【夢をかたちに】 厳しい生活の中でも夢をもって生きている人や、彼らを支えるために現地で頑張っている人の生き方にふれ、自分の生き方について考える。		
			GT JICA 内山さん	
成果	世界には多様な文化があり、自分たちとは異なった価値観を持つ人が多く存在しているが、経済的な格差や貧困等の課題があることを知った。青年海外協力隊員として、現地で働く日本人の生き方に共感することができた。			
課題	エチオピアの現状について理解することはできたが、心理的な距離はまだ離れていると考えられる。住む国や文化が異なっても同じ人間として共感できることを考えたが、十分とはいえない。			
備考	参観授業を活用して保護者へ啓発したり、6年生にも一部の活動に参加してもらったりした。体験的な活動を多く取り入れた。			

[授業実践の詳細]

1 時限目 「エチオピアってどんな国？」

1 子どもの活動の流れ

- ① エチオピアを教材にした Yes/No クイズに取り組む (個人)
- ② グループや親子で相談することで考えを深める
- ③ 教師の話聞きながら、エチオピアについて理解する
- ④ エチオピアのコーヒーを実際に飲み、外国の雰囲気を感じ取る

2 子どもの活動の成果・反応

◇子どもたちの多くはエチオピアという名前は知っていた。しかしエチオピアがアフリカにあることや、コーヒーの産地であること。人類のルーツの一つにも数えられキリスト教の古代遺跡があったりするほどの歴史のある国であることは知らなかった。

◇Yes/No クイズは教師の答えを聞くだけでなく、自分たちの力で想像をめぐらせながら、問題を解いていくことができるので子どもたちもより主体的に取り組むことができた。

◇参観授業としておこなうことで保護者も共に考える機会となり、家庭でも話し合いをもつことができた。

【子どもの声】

夏休みに先生がエチオピアに行くと言っていましたが、本当に行ったんですね。エチオピアは日本の東京のようなところもあるし、昔の日本のようなところもあって不思議でした。それから同じ国なのに言葉がたくさんあるのも日本とは違うなと思いました。

エチオピアの国の勉強ははじめてしました。前の交流学习のときにネパールの勉強をしたことがあるので、外国の勉強は2回目です。前よりよかったことはコーヒーが飲めたことです。私はコーヒーはあまり好きではありませんが、お母さんは、あっさりしていておいしいと言っていました。

3 使用した教材

- <教材 1> エチオピア Yes/No クイズ
- <教材 2> エチオピア産コーヒー
- <教材 3> エチオピアの写真

この時限のねらい

本学級の子どもたちは、外国についてあまり関心がなく、欧米の一部の国を除いては、マスコミに頻りに登場する国くらいしか興味がない。また、日本が多くの子どもの国と関係のもとで存在していることも実感をもたない理解はできていない。そこで、まずクイズを通してエチオピアについて考え、エチオピアから持ち帰ったコーヒーを飲むことで、外国との繋がりを実感させたい。



1 子どもの活動の流れ

- ① エチオピアで撮影してきた動画をもとに、コーヒーセレモニーの様子やその目的を理解する
- ② フライパンを使って、実際にコーヒー豆を焙煎し、ミルを使って適度な大きさに挽く
- ③ 家族への感謝の手紙を書く
- ④ 家に持ち帰ったコーヒーでコーヒーセレモニーを催し、家族に感謝に気持ちを伝える。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇現地のコーヒーセレモニーの様子を見て、直火で焙煎していることに驚いていた。また、コーヒーセレモニーがおもてなしの意味があることを伝えると、茶道を習っている子が日本と同じだなと呟いていた。
- ◇コーヒーを焙煎することは全員が初めての経験だったので、楽しく取り組むことができた。
- ◇ミルで豆を挽くと、コーヒーの香りが部屋中に充満し、子どもたちから大歓声があがった。
- ◇何人かの保護者の方から、お礼と取り組みに肯定的な内容のお手紙をいただいた。

【子どもの声】

僕たちの班は、豆をいれるのに一番時間がかかりました。その分おいしいと班の友だちが言っていました。家に帰って手紙を読んで、父さんとコーヒーセレモニーをしました。お湯が多すぎて味が薄くなってしまいましたが、おいしいと言ってくれました。

コーヒーの豆をいったのは初めてでした。最初豆が白いのに驚きました。だいぶ時間がかかったので、エチオピアの人はたいへんだなあと思いました。ミルでガーッとした時とてもいいにおいがしました。家で母さんと兄さんにコーヒーセレモニーをしてあげました。モカに味が似ていると母さんが言っていました。とても楽しかったです。

この時限のねらい

子どもたちが一番身近に感じるエチオピアがコーヒーであり、エチオピアにとってもコーヒーは最大の輸出製品である。またコーヒーセレモニーは日本の茶道とも共通する部分があるエチオピアの文化でもある。

まず、子どもたちに焙煎、粉碎、抽出のコーヒーセレモニーの過程を実際に体験させることで、エチオピアへの理解を深めたい。同時に家族への感謝の気持ちを伝えることで、コーヒーセレモニーに込められたエチオピア人の心を考えさせたい。



3 使用した教材

<教材1>エチオピア産コーヒーの生豆

<教材2>フライパン、ミキサー

<教材3>現地で撮影したコーヒーセレモニーの動画

3 時限目 「もっと知ろう！エチオピア」

1 子どもの活動の流れ

- ① 就学率や識字率の問題について日本と比較して考え、エチオピアの課題をとらえる
- ② 子どもが学校に行けない原因を考え、グループで討議する
- ③ グループで考えた内容を全体でシェアし考えを深める
- ④ エチオピアでの経験を教師から聴き学ぶことの大切さについて考える
- ⑤ 貧困や経済格差が生まれる原因について考え、次の学習に繋げる。

2 子どもの活動の成果・反応

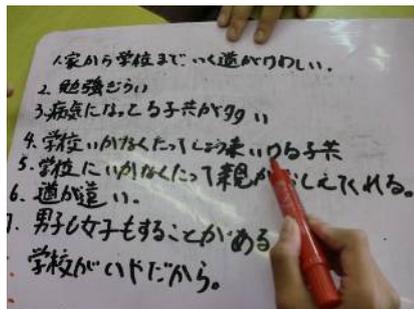
- ◇ 開発途上国の子どもが多くが、学校に行けない状況にあることは知識として知っていたが、その原因を考えることで、エチオピアの内情を想像することができた。
- ◇ 就学率と識字率の関係を考えることで、学校で学ぶことの大切さを考えた。
- ◇ エチオピアでの経験を聴き、基礎的な学習が十分できていないと、働くうえで困難を伴うことが多いことを知った。
- ◇ 普段当たり前と思っている日本の生活環境が、世界の多くの国と比較すると恵まれた環境であることを知るとともに、厳しい環境の中でも学ぶ意欲を持ち続ける子どもたちの姿を共感的にとらえた。

この時限のねらい

これまでの学習を通して、コーヒーを中心とするエチオピアの文化に関心を持ち、日本との繋がりにも目を向けながら、学習をすすめてきた。この学習では、エチオピアがもつ課題、とりわけ貧困と就学率・識字率の低さに目を向けさせたい。指導にあたっては、これらの問題を否定的に捉えるのではなく、厳しい環境の中でも意欲をもって学ぼうとしている姿を共感的に捉えさせたい。また、学校で学ぶことが自分たちの未来を豊かにしていくことに繋がっていくことも合わせて考えさせたい。

【子どもの声】

今日の勉強で、エチオピアの子どもたちはたいへんなんだということがよくわかりました。教科書が無かったり、家の仕事をしなければいけなかったり、わたしたちとはずいぶん違います。私もエチオピアの子どもたちに負けないよう、がんばらなければいけないと思いました。



3 使用した教材

<教材1>ワークシート（自作）

<教材2>ホワイトボード

<教材3>PC

4 時限目 「経済格差が生まれる原因を考えよう」

1 子どもの活動の流れ

- ① 前次の学習を振り返り、貧困や経済的な格差が生まれる原因について考えることを意識する
- ② 簡単な貿易ゲームをおこなう
- ③ 学習を振り返り、開発途上国と先進国の間にある多様な問題やについて知る
- ④ 開発途上国の生活の向上のために、頑張っている日本人を紹介し、次の学習に繋げる

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 簡単な三角形をつくる内容のゲームであったため、子どもたちは楽しくゲームに取り組んだ。
- ◇ 途上国の立場に置かれた子どもは、不合理さのために興奮して泣き出したり、先進国の立場の子どもと喧嘩になったりする場面が見られた。
- ◇ 活動の終盤で、技術、知識、人材などの不足が開発途上国の課題であり、先進国からの技術移転や経済援助等が大切であることを学んだ。

【子どもの声】

今日の勉強で、僕たちの班の人はみんな怒っていました。先生に勝手に決められてこのグループに入れられたからです。A班の人たちも、自分たちのところにはたくさん道具があったのに僕たちには貸してくれませんでした。前の授業のときは、国どうし助けあったらいいと言っていたのに、今日はそれができていませんでした。

この時限のねらい

これまでの学習を通して、エチオピアは豊かな自然に恵まれ、多様な文化を育むすばらしい国であることを学んだ。しかし、一方で就学率や識字率の低さなど、貧困に起因する多くの問題が山積していることも学習した。しかし、子どもたちは知識としては理解しているものの、どこか遠くの国のできごとであり、ましてや日本を含む先進国にも問題を生み出している一端があることには気づいていない。そこで、貿易ゲームを通して、途上国の実態を疑似体験させることで、よりリアルに感じさせるとともに、日本も含めた先進国との関係についても考えさせたい。



3 使用した教材

<教材1>日本円の疑似通貨

<教材2>ハサミ、コンパス、さし、分度器などの文房具

<教材3>A4サイズの紙多数

5 時限目 「夢をかたちに」

1 子どもの活動の流れ

- ① 厳しい環境の中でも懸命に生きている子どもたちの姿から、夢をもって生きることの大切さについて考える。
- ② 自分の将来や夢について具体的に考える。
- ③ 友だちに、自分の夢を語ったり、友だちの夢を聞いたりしながら、将来に向けて今できることを考え『夢カード』をつくる
- ④ ゲストティーチャー（GT）の話を聞き、夢を実現させるための過程が大切であることを考える
- ⑤ クラスの友だちに、自分の夢について語る[自己決定]
- ⑥ 友だちの夢カードに応援のメッセージを書く

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 子どもたちは、エチオピアの学習を通して、学校で学ぶことの意味やその重要性について考えることができた。
- ◇ 将来の夢は、今の生活や学びと繋がっていることを改めて考えることができた
- ◇ GT との出会いにより、子どもたちの学びは、より現実的で深みのあるものとなった。
- ◇ 応援メッセージの交換により、子どもたち同士の絆が深まった。

【子どもの声】

今日はたくさん先生が来てくれたので、少し緊張しました。今日言ったことは前から考えていたことだけど、みんなの前で発表するのは少し恥ずかしかったです。内山さんは夢は変わることもあると言っていました。私の夢は、変わるかわからないかわからないけど頑張っていきたいです。

今日の勉強は楽しかったです。内山さんは外国に行きたいと思っていて本当に行ったのですごいと思いました。外国で仕事をするなんて私には無理と思うけど。いつかエチオピアに行ってみたいです。

この時限のねらい

国際理解教育は、外国の文化や伝統、国と国との関係性を学ぶことが多い学習である。こういった学習を通して、多様性を認め、地球市民としての生き方を考えたり、経済格差の少ない平等な社会の在り方を志向したりする。私は、外国のことを学ぶのはもちろん大切であるが、学習を通して自分の生き方を見つめる活動でなくてはならないと考えている。外国の子どもたちの幸せを願うなら、クラスの友だちの人権をまず大事にしなければならない。そして何よりも自分自身を大切にしなければならないからである。子どもたちには、これまでの学習やGTとの出会いを通して、学校で学ぶことが自分の人生をつくっていく礎となること、そこから将来の夢が生まれることを学んで欲しい。

3 使用した教材

<教材> 自作ワークシート『夢カード』

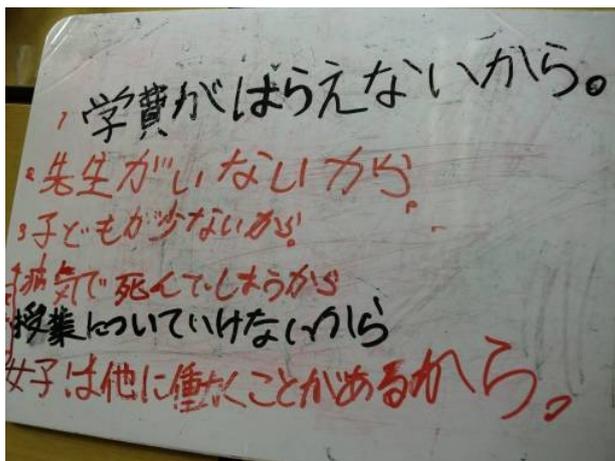
<G T> JICA 職員 (元青年海外協力隊隊員)

■ 全体を通して

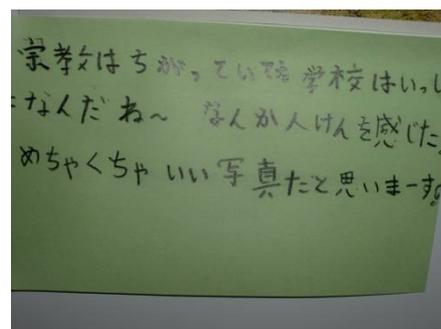
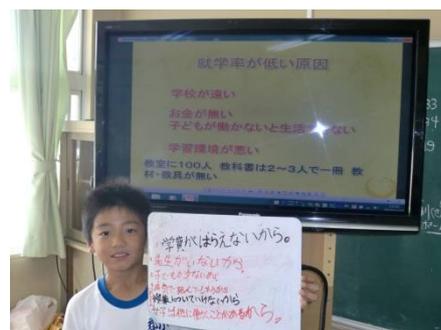
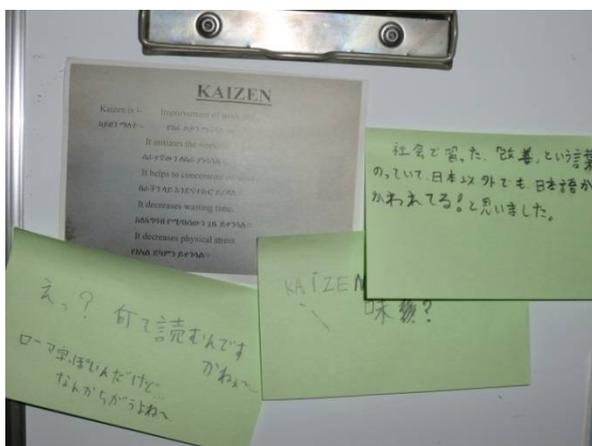
1 授業の様子

自分が体験してきたことを子どもたちに伝えるとともに、できる範囲で疑似体験できるように単元を組んだ。疑似体験させることで、自分がエチオピアで感じたように子どもたちにも何か感じてほしかったからである。実践にあたって、子どもたちには、私のフィルターを通したものでなく、子どもたち自身の感性で感じとれるよう配慮した。フライパンでコーヒー豆を焙煎したり、家族をコーヒーセレモニーでもてなしたり、貿易ゲームで格差や貧困の不条理を体験したり、ときには30キロの重さを背負ってみたりもした。子どもたちそれぞれにエチオピアを体感したことと思う。

単元の最初は、保護者にも授業を公開した。これから子どもたちと学ぶことを保護者に知らせるとともに家庭でも国際理解教育について話し合う機会になると考えたからである。また6年生の子どもたちにも取り組みの一部を公開するなど、他学年との連携も試みた。



<写真> 学校へ行けない理由を考える



<写真> 『KAIZEN』という日本語を見て

2 参考文献・資料

無し